

サケの受精仕組み学ぶ

帯水協 開西小で人工ふ化体験会



解体したサケの体に触れる児童

帯広川伏古地区子どもの水辺協議会(帯水協、関川三男会長)によるサケの人工ふ化体験会が5日、帯広開西小学校で行われた。参加した児童はサケの特徴や受精の仕組みを学び、理解を深めた。

帯水協は5年前から帯広川にサケ稚魚の放流を行っている。今回のふ化体験は児童に生き物の一生を知っ

てもらおうと、地域交流を目的に初めて行った。

同校児童5、6年生と帯水協の会員ら35人が参加。初めに元水産総合研究センターさけ・ますセンター帯広事業所長の石垣さんが受精の仕組みを解説。児童は実際にサケの心臓や肝臓に触れながら説明を受け、積極的に質問をした。

続いて石垣さんがボウル

に移した雌のサケの卵子に精子を振りかけ、帯広川の水を加えた後、児童が手で混ぜると受精が完了。受精卵の一部は同校の水槽に移され、児童が温度や水質管理をしながら12月ごろのふ化を待つ。

参加した西尾つむぎさん

(5年)は「えらを触るのは初めてで少し気持ち悪かったけれど、呼吸のために必要なことを知って驚いた」と話した。同校の山川校長は「今回の体験会のように地域社会が子供の教育に関わることの意義は深い」と振り返った。(高津拓也)